

## 補遺 2

### エドゥアール・グリッサン氏に聞く

(2005年12月24日マルチニック)

2005年12月24日、著者はマルチニック島ル・ディアマンのエドゥアール・グリッサンの自宅を訪問し、この論文に直接関係するいくつかの質問を行った<sup>1</sup>。

質問をするにあたって、著者がグリッサンの「歴史」への取り組みに関心があること、そしていま「歴史」がグローバルな文脈のなかで改めて問われていることを彼に述べた。以下はその文脈のなかで提出された質問である。

——最初に「非-歴史」という概念について質問いたします。あなたは『アンティューユ論』においてアンティューユの人びとにおける「非-歴史」について何度か述べています。この概念によってあなたは彼らの歴史意識が否定される、あるいは剥奪される側面を示しています。私は、「非-歴史」は大文字の歴史の優位によって何か排除されたものを示していると考えます。このため、人は断続的な仕方ではか記憶、意識、時間を感じることはできません。だとすれば、「非-歴史」とはいまだに現勢化されていない歴史の潜在性を表

---

<sup>1</sup> このインタビューは東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」の 2005 年度助成金を受けて可能になった。

していると言えるのでしょうか。

グリッサン：いえ。「非-歴史」の潜在性を、それが歴史としていまだに現勢化されていないと言うことはできません。さまざまな人類の進展において、実際には、二種類の人間の共同体があると思います。一方には、自然に拡大へと向かう共同体がありますね。それにはしかるべき理由があります。たとえば、西欧では技術の進歩が実現されるたびに、技術は他所へと向かうために輸出され、利用されてきました。これは、たとえば、中国や日本の例とは異なります。中国と日本は長期にわたって技術を進歩させており、とくに中国は火薬、大砲、羅針盤といった技術的進歩を経験してきました。ところが彼らはその技術進歩を他所へ向かうために利用することはなかった。なぜなら、彼らは中国こそ——当時はまだ中国ではありませんでしたが——世界の中心にある帝国であり、大地の本質であると見なしていたからです。だから他所へ向かう理由はなかった。ところが、イギリス人、フランス人、スペイン人、ポルトガル人といった西欧の諸民族は、他所へ向かい、新しい土地を見つけるといったことを欲してきました。この欲望は、歴史の加工（*fabrication de l'histoire*）の土台そのものとなるものです。歴史の加工とは、歴史を生きるのではなく、それを作り出す（*fabriquer*）ことです。それは、一般的で普遍的な理由を——しかも普遍という概念は西欧から生み出されたものでした——を見つけることを、歴史を作り出すという一般的で普遍的な概念や理由を見つけることをある種の使命とすることです。つまり、歴史を作ることは他の人びとによって分かち合われることです。その歴史が強要され、強制される場合にあってもそうです。したがって、この意味で歴史に関心をもった民族は多くいますが、歴史という一般観念に関心をもち、歴史を作り出すという必要性に囚われた人びとはいなかった。そしてこれはすべて西欧

が作り上げたものなのです。ですから、そうした民族が、歴史の一般概念をもたないということは、彼らには歴史が存在しなかったということの意味を意味しません。そうでなく、西欧が歴史の加工として強いようとしてきた歴史が存在しなかったということの意味するのです。そうでしょうか？ だからこの意味で、大文字の歴史とはほとんど西欧の加工に他なりません。そして大文字の歴史は拡大、征服、そして最終的には、植民地支配を前提とするのです。そしてこのために、植民地支配は、最終的に、「全-世界」、世界の全体性を実現することを許すものであったのです。ですから、大文字の歴史 (l'Histoire) と歴史 (l'histoire) の違いは、大文字の歴史が諸民族の複数の歴史への認識を、一般史を理由に、つねに排除し、消そうとしてきたということにあります。こうしたことを私は考えています。

——諸民族の複数の歴史は、今日、いまなお潜在的なものにとどまっていると言えるのでしょうか。

グリッサン：もちろんです。なぜなら私たちは諸民族の複数の歴史からいまだに引き出すべきさまざまな結論を得ていないからです。いつの日か、諸民族の複数の歴史は、大文字の「歴史」という中心を介さずに直接隣接しあえるでしょう。アフリカ、中国、ブラジル、メキシコといった諸民族の複数の歴史は、アメリカ、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガルといった中心を介さずに隣り合えるでしょう。その時、諸民族の複数の歴史は、真の密度 (une réelle densité) を持ち始めるでしょう。そうした日がすぐに訪れるか、まだだいぶ先のことになるのかは、分かりません。しかし、そうした日が訪れると私はつねづね考えています。たとえば、国際会議などの場では、現在、じつに多くの出会いがあります。もちろんその前にも、エジプトのナセルの

時代に、非同盟の諸民族がいました。しかし、それはイデオロギーに刻印されたもので、きわめてイデオロギー的で、直接の接触ではなかった。その接触は共産主義イデオロギーや第三世界主義イデオロギーなどを介したものであり、直接の接触ではなかったのです。現在では、諸民族の歴史の出会いの日は訪れると考えています。しかしまだ到来してはいません。

——あなたは1961年刊行の『ムッシュー・トゥサン』の序文以来、「過去の預言的ヴィジョン」という概念を提唱しています。これは忘却のなかに失われしまったものを救い出し、想像するための理念です。そこでお尋ねしたいのですが、どうしてあなたはこの概念に「預言的」(prophétique)という形容詞を用いているのでしょうか。これは狭義の預言者に関するものなのでしょうか。

グリッサン：いえ。この理念は……そうですね……われわれが教育として強いられ提示されるような歴史とは、その根底で完全に強いられた歴史です。今日、植民地支配が肯定的なものだった云々と述べるフランス政府を見れば分かることです。そういう形で私に示される歴史とは、偽りのものです。われわれが生きた現実の歴史に触れるには、[現実の歴史を]われわれに提示される歴史の下に探求しなければなりません。われわれは生きられた現実の歴史に触れられると私には思えます。われわれは、われわれが言われてきたことの下に今日何かを見つけるわけですが、われわれはそれを預言的手法によって過ぎ去ったものへと向けなおすのです。われわれは言われてきたことの下に実際に過ぎ去ったものを見出します。それは預言者たちの預言ではなく、詩人たちの預言なのです。

らこそ、パパ・ロングエの実存は不確かなのです。だからその実存は強烈な  
のです。そうでしょう？ 彼は機械的ではなく、そんな風にまったく定めら  
れてはいません……だからさらにはもう一人の登場人物であるマリー・スラ、  
つまりミセアもまたドラマティックなのです。なぜなら歴史と歴史との均衡  
を取り戻せないかぎり、あらゆる意識は、苦しんでいる意識であり、耐え難  
い意識であるからです。

2005年12月24日ル・ディアマン（マルチニック）

——それは靈感ということですよ。

グリッサン：そうです。

——『第四世紀』のパパ・ロングエがこのヴィジョンを発揮しているはよく指摘されます。『第四世紀』では、パパ・ロングエは未来を予見する呪術師です。しかし彼は過去もまた「見る」ことができます。この意味で、パパ・ロングエは『地獄の季節』の詩人のような見者です。申し上げたいのは、「過去の預言的ヴィジョン」とは「見る」という行為と不可分であるということなのですが、この観点から興味深いのは、『奴隷頭の小屋』にはもはやパパ・ロングエのように過去を見る人物がもはや登場しないことです。パパ・ロングエの分身であるピタゴラ・スラは過去を直接見ることはできません。彼は過ぎ去ったものを垣間見ることしかできません。『第四世紀』では、パパ・ロングエを、力を発揮する見者として見なせます。では『奴隷頭の小屋』でのこの見者の不在は過去の回復の不可能性を示していると思なせるのでしょうか。

グリッサン：そのことを『第四世紀』や『奴隷頭の小屋』といった小説における過去の回復の不可能性と見なすことはできます。なぜなら過去は現在において取り戻されるわけですが、過去はいつもポジティブに現在するとは限らず、苦しみ、無意識、ドラマとして現在することもあるからです。かつて実存主義者たちが「実存主義とはドラマティックである」と述べましたが、それにやや似ています。だから私は、この小説世界には実存のドラマがあるのだと思います。歴史 (l'histoire) と物語 (des histoires) の問題が解決されない限りは、そこにはいつもドラマがあるでしょう。それが解決されないか